

〈震災から3年目を迎えて〉 いわて

語らいが生まれる場で

いわて生協「グループ活動費用補助」を利用した活動



「いきいき教室」の皆さん。左から奥 良子さん、長谷川節子さん、盛合栄子さん、長洞辰子さん。

岩手県宮古市の高台にある弘川仮設住宅。その一角にある談話室から、にぎやかな笑い声が聞こえてきました。毎日、午前9時過ぎから午後3時ごろまで活動している「いきいき教室」の皆さんです。2011年10月に活動をスタート。6人のメンバーでお手玉やひざ掛け、バッグ、鍋カバー、

帽子などの手芸品を丁寧に作っており、商品はいわて生協マリンコープDORA（宮古市）で販売しています。

お伺いした3月12日は縫い針などを刺しておく針山やティッシュボックスケースなどを製作していました。「みんな震災前は針仕事なんかしたことないのよ」と笑うのは長洞辰子さん。しかし、かきの養殖の仕事で培われた器用な指先からは、次々と作品が出来上がります。

実は、材料費やお菓子、お茶などの購入には、いわて生協の「グループ活動費用補助」を活用しています。これは被災地や内陸に避難した方が5人以上集まって行なうサークル活動やお茶会などを対象に、1回3,000

円（1カ月最大4回まで）を上限にいわて生協が補助しているものです。

「ここはいつもにぎやかで、最高の場所なんです」とメンバーの盛合栄子さん。このように日々、語らうことができる場所があることは、被災した方にとって大きな励みとなっています。



5個セットお手玉はマリンコープDORAでも販売中。

写真で見る「被災地のいま」

撮影者：いわて生協 小野寺真さん ①
いわて生協 杉村洋一さん ②、③
いわねスタジオ ④、⑤
2013年3月11日付近撮影



① 一角には、いまだがれきが積み重なっている（釜石市）。



② 「うごく七夕まつり」の山車。保管場所が確保できないため、ブルーシートをかけて風よけにしている（陸前高田市）。



④ 高台から望む（山田町）。



⑤ 津波到達地点から望む（宮古市鉾ヶ崎）。



③ 奇跡の一本松復元の様子（陸前高田市）。

〈震災から3年目を迎えて〉みやぎ

みやぎ生協全店舗で、ふるまい企画実施

食のみやぎ復興ネットワーク※ 64 団体が参加



テントでは、あたたかい「白石温麺」を振る舞い、好評だった。

3月2日、9日、10日にかけ、食のみやぎ復興ネットワーク(以下、食ネット)主催の「みやぎを元気にするふるまい企画」が、みやぎ生協全店舗で行なわれました。企画には、64団体が参加しました。

3月9日、石巻渡波店では、日本製粉(株)・白石興産(株)・日本生

協連から「えび天白石温麺」、ハインツ日本(株)からトマトケチャップとフライドポテト、日本製紙クレシア(株)からティッシュ、マスクなどが配られました。

石巻渡波店は、東日本大震災の被害を受けて改装を行ない、昨年12月に最後の復旧店舗として再オープンをした店です。店舗周辺は津波の被害を大きく受けており、建物もまばらです。近隣の仮設住宅から来店した組合員からは、「再オープンはうれしい」という声が聞かれました。

ハインツ日本(株)東北オフィスの及川さんは、「食ネットの取り組みに感銘を受け、活動に参加しました。現在もまだ、寒い風が吹く中、テン

トで作業している生産者さんがたくさんいます。ハインツ日本では、そんな方々に仮設集会所、番屋、仮設わかめ加工場を寄贈するなど、復旧支援に力を入れてきました。まだまだやることはたくさんあります。復興への思いを心に秘めて、継続して活動していきます」と復興に向けた決意を話してくれました。



部活帰りの高校生も立ち寄りしてくれた。

※ 食を通じた復興に取り組むプロジェクト。
3月20日現在の参加団体は、217団体。

写真で見る「被災地のいま」

撮影者：みやぎ生協広報担当

2013年3月11日～12日撮影

「被災地及び震災学習・資料室視察ツアー」にて



津波と火災で使えなくなった石巻市立門脇小学校。



震災語り部「三浦さき子」さん(前列左から2番目)。津波被害を受けた南三陸町戸倉小学校にて。



南三陸町、防災庁舎前。



視察に訪れた生協関係者ら。



コープ中国四国事業連合より、食のみやぎ復興ネットワークへ義捐金の贈呈。

〈震災から3年目を迎えて〉 福島

動き出した福島の漁業復興

コープふくしまコープマート方木田店で、復興の取り組み状況の説明



説明に、熱心に耳を傾ける組合員たち。

3月9日、福島県主催の「ふくしまの海産物～漁業復興に向けての取り組み」が、コープふくしまコープマート方木田店で開催され、約100人の組合員が来場しました。漁業復興の取り組みを、店頭で直接消費者に説明するのは、県としては初めての試みです。

福島県農林水産部参事兼農産物流通課長の吉田 肇さんは、「福島県では、放射線に関する世界一厳しい検査体制を敷き、その結果をホームページで公開しています。全国の皆さんに、福島の取り組みを知って、信頼していただきたい」とアピールしました。

相馬双葉漁業組合総務部長の遠藤和則さんは、「現在は、まだ試験操業で、安全な13魚種が流通しています。本来は約150魚種ですから、まだごく一部です」と現状を報告。

コープふくしま理事長の今野順夫さんは、「生協は、消費者の味方の組織。ひるがえれば、生産者もまた消費者であり、協力しながら歩むこ

とが大切」と話し、家庭の食事の放射性物質摂取量調査から、県内の食材を使った料理は健康に影響ないと発表しました。

この日、方木田店の水産売り場には、相馬市の原釜漁港に水揚げされたミズダコ、キチジ、ズワイガニなどが並び、組合員から歓迎されました。震災から2年、福島の水産業は、少しずつ復興に向かって動き出しています。



活気ある方木田店の水産売り場の様子。

写真で見る「被災地のいま」

撮影者：フリーライター 西村一郎
(コープふくしま理事 渡邊洋子さん案内の下)
2013年3月15日撮影



松原や堤防も津波でなくなり
1本だけ残った松 (南相馬市の海岸)。



砂に埋もれた子どもの靴 (南相馬市の海岸)。



震災の傷跡が今も残る (南相馬市)。



地盤沈下し、水たまりが所々見られる (南相馬市)。



片付けが進まない倒壊した家屋 (南相馬市)。



建物の基礎だけになった場所には
雑草が生えていた (南相馬市)。